

「第41回全国高校生読書体験記コンクール」の中央入賞者の皆さん、受賞おめでとうございます。

今回は全国449の高等学校から、昨年を大きく超える83,500編あまりの応募がありました。作品をお寄せくださった全国の高校生、先生、各地の新聞社の方々、そして選考にあたられましたすべての皆さまに厚くお礼を申し上げます。

昨年来、新型コロナウイルス感染症との闘いは続いていて、私たちの、生きる上で大切な人との対話や集まりや移動が制限されて、これまでの日常は大きく変わりました。いま世界は歴史の転換期を迎えています。

このコンクールは、高校生に、自分の読書体験を綴っていただくことによって、自分の人生と読書のかかわりをあらためて見なおし、読書の喜びと楽しみを発見していただくものです。

一冊の本との出会いが、さまざまな生き方や考えを知り、豊かな人生を歩む力になることを願っています。これからの時代を拓き、これからの社会を担う高校生を応援してまいります。

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

理事長 廣野眞一

作品名をクリックすると作品に移動します。

目次

中央入賞者発表	1
「第41回全国高校生読書体験記コンクール」について	2
文部科学大臣賞	
聾者は障害者か？ 奥田桂世	4
全国高等学校長協会賞	
夢の折り目 永田詩織	6
親への嘘は愛情か 岡崎愛子	8
一ツ橋文芸教育振興会賞	
いつか、カムパネルラに 佐藤楓恋	10
未完 原崎咲来	12
叶えたい未来のために 木和穂乃香	14
もしも恐竜がいなかったら 高須賀風牙	16
大石先生が伝えられなかったことを私が 矢野愛実	18
中央選考委員選評	20
辻原登／穂村弘／角田光代／長尾篤志／林達也	
入賞者一覧	25

受賞者名をクリックすると作品に移動します。

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者発表（敬称略）

【文部科学大臣賞】

千葉県 筑波大学附属
聴覚特別支援学校 三年

奥田桂世 聾者は障害者か？
（体験書籍『生贄探し 暴走する脳』中野信子・ヤマザキマリ 講談社）

【全国高等学校長協会賞】

栃木県 小山工業
高等専門学校 三年

永田詩織 夢の折り目
（体験書籍『イマジン？』有川ひろ 幻冬舎）

【全国高等学校長協会賞】

愛知県 豊田工業
高等専門学校 一年

岡崎愛子 親への嘘は愛情か
（体験書籍『ビタミンF』より「セツちゃん」重松 清 新潮社）

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

岩手県立宮古高等学校 三年

佐藤楓恋 いつか、カムパネルラに
（体験書籍『新編 銀河鉄道の夜』宮沢賢治 新潮社）

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

石川県立金沢泉丘高等学校 一年

原崎咲来 未完
（体験書籍『縮図』徳田秋聲 徳田秋聲記念館）

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

京都府立乙訓高等学校 三年

本和穂乃香 叶えたい未来のために
（体験書籍『見習い警察犬 きな子 〜圭太の物語〜』ひろはたえりこ 汐文社）

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

兵庫県立飾磨工業高等学校 二年

高須賀風牙 もしも恐竜がいなかったら
（体験書籍『鳥類学者 無謀にも恐竜を語る』川上和人 新潮社）

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

香川県立坂出高等学校 一年

矢野愛実 大石先生が伝えられなかったことを私が
（体験書籍『二十四の瞳』壺井 栄 講談社）

第41回 2021年度

「全国高校生読書体験記コンクール」について

このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社のご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに実施している事業です。多くの高校生ができるだけたくさんの方と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

第41回の本年度は、全国47都道府県から449校の参加があり、応募作品は83,538編となりました。

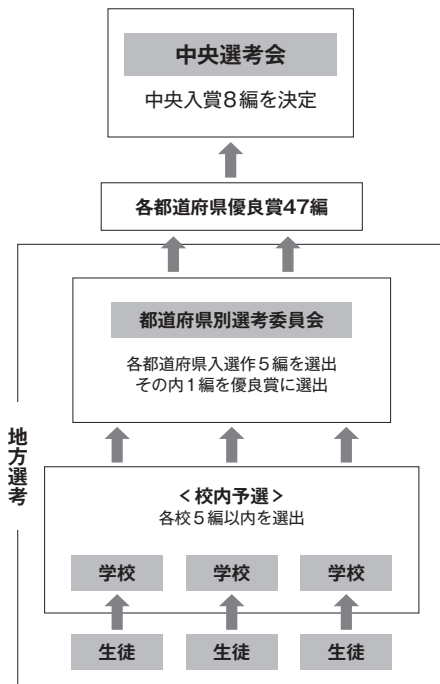
【選考】

◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。

◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考会に送られました。

◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

【作品の応募と選考の流れ】



【賞】

中央入賞 8名

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
- ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
- ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品

*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

*優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 185名 賞状・記念品

*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央選考委員（敬称略）】

辻原 登（作家）
穂村 弘（歌人）
角田光代（作家）
長尾篤志（文部科学省初等中等教育局主任視学官）
林 達也（全国高等学校長協会）

【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

【文部科学大臣賞】

聾者は障害者か？

千葉県 筑波大学附属聴覚特別支援学校 三年

奥田桂世

多様性を認め合う、多様性を尊重する社会の実現といったようなフレーズを最近よく目にする。しかし、これらのフレーズは私たち人間にとって、矛盾している言葉なのではないだろうか。脳科学者である著者の中野さんは、「ヒトは、異なる内面、異質な外見を持った者を、執拗に排除しようとする。集団は異質な者をどうにかして排除しようと足掻く。これは集団を作ること

で生き延びてきたヒトの特有の脳のクセなのである」という趣旨のことを述べている。

私は、中野さんが述べた人間の特性につ

いて正直驚いたが、この本を読んだ後、耳の聞こえない自分の存在や生き方について、見つめざるを得なかった。

私は先天性の聾で、両親も祖父母も聾者という家庭で育った。学校も乳幼児期からずっと聾学校に通っていた。だから、幼少期は、健聴者のことをむしろ「普通ではない」と思っていた。しかし、聾学校小学部に上がると近隣の健聴者と公園でよく遊ぶようになり、学校でも地域の小学校と交流する機会が増えた。その経験によって、本当は自分の方が普通ではないのだと自覚す

るようになった。それでも、自分のことを可哀想だと思う気持ちは全く生まれなかった。

当時はその理由が分からなかったが、「聾文化」という言葉を知った今ならば答えられる。「聾文化」とは、聴覚という感覚を持たないことで発生した手話という言語や、視覚と触覚を重視した生活から生まれた文化である。私は、聾者というものは、健聴者とは異なる文化を持った、「少数民族」のようなものだと思うようになったのである。

もしも、健聴者が生きる社会と聾者が生きる社会にはっきりとした境界があり、お互いに関わりを持たなかったら、社会で言われる「聴覚障害者」は全員、自分のことを「障害者」だと思わず、「聾者」という普通の人間として生きていたのではないだろうか。

しかし、現実はそのではなく、現実社会で生きていくためにはどうしても健聴者と共生しなければいけない。さらに、日本に住む聾者は「日本人」でもある。日本に住んで社会参加していくからには、日本語を習得し、様々な知識や技能を学び、日本文化に対する理解を深めることが必須である。私の場合は、日本語とは異なる独特の語順や文法が存在する「日本手話」という全く別の言語を、第一言語として身につけた。だから、日本語を習得するためには、手話等が使える健聴者に教えてもらったり交流したりしなければいけない。また、様々な文化に触れたり学んだりしなければいけない。そのような教育や社会生活の場面で、音や音声の情報が使いにくく健聴者の行う方法だけでは学ぶことが困難なため、独自の方法が活用されるのだ。聾者としてだけ

ではなく日本人としても生きていくために。そのことが「障害」「支援」という名称で語られ、健聴者に協力を求めることになる。そして、社会は私たちのことを「聴覚障害者」と呼ぶ。健聴者が中心の社会に足を一步踏み入れたとたん、周りは私たちのことを異質な者と理解し、独自の方法で教育やコミュニケーションがなされる「障害者」と名付けるのである。

これは、最初に述べたヒトの特有の性質によるものなのだろうか。最近法律が施行され、目立った「差別」や「排除」は少なくなってきたが、「可哀想」「大変だね」と上からの目線で見られることはなくならない。その要因は、他人を引きずり下ろすことで快感や安心感を得られる「シャーデンフロイデ」という、ヒトが根本にもつ性質にあるのではないだろうか。「障害者」と名付け、自分の持つ優位性を自覚して安心する心理が全体的に働くのかもしれない。「障害者」という言葉が消えてくならないのはそれが原因の一つにあるのではないだろうか。

私は自分自身を「聴覚障害者」ではなく、「聾者」としてのアイデンティティを持つ、

ひとりの人間として誇りに思っている。その一方で、補聴器や人工内耳を装用すれば、個人差はあるが音声言語でやり取りできる人もいる。だから、聞こえない人のタイプの違いを無視して「聴覚障害者」とひとくくりにして呼び、区別しているのは何だか乱暴なことにも思える。

私たちの住む社会には、本当に様々な人間がいると思う。自分たちと異なる人間を「異質なもの」として敬遠したり排除したりすることを「ヒトの脳はそういうもの」と当然のように考えて放置していたら、私たちの未来は明るくない。異なった文化を持つについても、異質であっても、何であっても、この世界に生きていることをお互いに受け入れる、尊重し合う姿勢が必要だ。そして、共に生きていくための合理的な配慮が普通にできる人間になるべきである。「障害者」という言葉を考え直すことが、「多様性」を維持する社会を実現する第一歩ではないかと強く思う。

体験書籍

『生贄探し 暴走する脳』中野信子・ヤマザキマリ

講談社

【全国高等学校長協会賞】

夢の折り目

前方車両から波のように伝わる揺れを感じながら、長く考え事をしていました。今は春休みですが、早く寝て、起きて、こうして電車に揺られています。同じ建築学科の先輩が設計し、制作している模型の手伝いをするためです。乗り物に酔いやすい体質を持つ私は、電車のシートでスマホの画面を眺めたり本を読んだりはしません。代わりに、後ろへ流れる畑や田んぼを視界の中に入れて、自分のことについて考えていました。

学校の成績は、入学当初より、二年生が終わった今の方がずっと良くなりました。試験前からは、毎日努力します。けれど、その努力も試験期間が終われば、なかったことのように感じます。間近な試験に向けてしか、頑張っていないからです。何のために机に向かっているかと聞かれたとき、「悪い点数を取りたくないから」としか答えられません。私の努力はその短い期間だけのものでした。この学校に入って、自分の志や憧れから努力をしている人たちが

に出会いました。対して、今の自分は空っぽで中身がないように思えて、自分で自分が嫌いでした。どうしてこの学校の建築学科にいるのかと聞かれたとき、そんな私はなんと言えがいいのでしょうか。電車に揺られながら、迷い続けていました。

私は、有川ひろという作家さんが好きです。今年の一月には『イマジン?』という彼女の本を買いました。あらすじを知らないまま手に入れましたが、有川さんが久しぶりに出す新刊で嬉しかったことと、遠く

栃木県 小山工業高等専門学校 三年

永田詩織

へと走り出すその瞬間のような躍動感ある表紙が印象的だったことを憶えています。

物語の主人公のイーくんは、映画に関わる仕事をしたという夢を持って上京しましたが、諦めてフリーターとして働いていました。しかし知り合いに誘われた映像制作のアルバイトでがむしゃらに働くうち、会社の社長から直々に、「正社員に採用だ」と言われます。イーくんは、嬉し泣きする程喜びました。

電車で揺られて数週間経った頃、提出締切が近づき、手伝っていた先輩の模型は完成間近です。前の週に作った八百本余りの柱の棒を、床となる白い板に、接着剤で立てていきます。それが終われば板を七層に重ね、一つの建物の立体模型へと起します。イーくんと社長の会話のなかで、心に残っている言葉があります。「俺の折り目だったんですよ。スペースゴジラって」。心が振れた言葉を後になっても読み返せるように、本の端につける折り目。イーくんの人生の折り目は、幼い頃、地元の街で撮影されていた映画スペースゴジラ。ゴジラが住み慣れた風景を踏み倒していく映像を見たとき、夢のような映画の世界は、魔法使

いのようなスタッフが、自分と地続きの世界で作り上げていると気付きました。その時芽生えた憧れが強くなった折り目は、彼がフリーターになっても、くつきりと残ったままでした。

本を読み終えてから、私の夢の折り目があるのかという疑問が、頭の端にずっと残っていました。中学生だった頃今の学校に来て、先輩方が設計して作った模型を見て、受験を考えた日。建築士の方が書いた本を読んで、その考え方に感動と共感を覚えた日。小さな折り目は沢山ありましたが、強くつけられたと言える折り目は、まだ無いままでした。一月に本を読んでから、主人公の頑張りを応援したくなる一方で、自分にもこんなに頑張れる夢が欲しくなっていました。

模型のフロアを重ね合わせたとき、私は大きな喜びを感じました。自分が立てた柱が、床からむき出しの梁とぴったりに組み合わさり、意味を為す三次元の立体に起ったからです。学校見学で見た先輩方の完成された模型もすごいと思いました。自分が実際に関わったものだ達成感もあり、喜びもひとしおです。設計は、もともとある

病院の敷地の林に小児病棟を建てるというものでした。重い病気にかかり免疫力がない子供は、感染症の予防のため、兄弟にも直接会えないそうです。平面図では横にくつきりと仕切って病の子供とその家族を隔てていたそれぞれの空間も、模型で見ると吹き抜けの穴で縦に繋がっているのがわかります。お互いの声や生活音が伝わって、対面できなくても繋がりを感ぜられるのです。その時、ただの直感ですが、この瞬間のページに私の折り目をつけたと思います。「この、重なる瞬間が面白いよね」と笑っていた先輩や作業に関わっていない他人から見てもないような小さな出来事でも、自分の本の折り目にしたいと。こういう折り目が増えていくたびに、空っぽだった嫌いな自分も、読み古された本のように、愛着が湧いていくような気がします。嫌いだっただ自分から、折り目のページを思い返して『イマジン?』の表紙のイーくんのように一歩踏み出せば、私はもう大丈夫だと、胸を張っていけそうです。

体験書籍

『イマジン?』 有川ひろ 幻冬舎

【全国高等学校長協会賞】

親への嘘は愛情か

真っ赤な嘘という言葉があるが、もしも嘘に色があるならば、私は虹色の嘘をつきたい。多面性を持っている、そんな嘘を。「嘘はいけないことなのか」という問いに対して幼少期は「嘘は泥棒の始まり」だと教わり、いけないことだとされてきた。しかし、私はこの十六年間で幾度となく嘘をついた。さまざまな人と関わる上で、嘘をつくべき場面だと判断したことも一度や二度ではない。いつか社会人になり、目上の人と関わる機会が増えれば、嘘をつくべき場面は増えていくのだろう。十六歳の幼き

少女にはまだ分からないことなのだが。ただ、この十六年間の嘘にまみれた人生でたった一つ明確になっていることがある。それは「両親に対してついた嘘が最も多い」ということだ。最も長く時を共にしてきたゆえ、自然なことであるのかもしれないが、「最も信頼している両親」に、「最も多く嘘をついた」ということに対して「親への嘘は愛情か」という疑問が生まれた。そして『ビタミンF』所収の「セツちゃん」を読み、透き通る海にぼつんと浮かんでいる答えを安らかな満足と共に得ることができた。

『ビタミンF』所収の「セツちゃん」に出てくる加奈子は私と似ている。おしゃべり好きで、一日にあったことを一から十まで話さないと気が済まない。そして、自分のアイデンティティを守るために両親に嘘をついているところが昔の私に似ているのだ。加奈子は中学二年生、当時の私は小学六年生だった。加奈子はいじめられている自分のことを転校生の「セツちゃん」に置き換えて両親に話している。運動会でやる創作ダンスの振り付けが変わったことを一人だ

愛知県 豊田工業高等専門学校 一年

岡崎愛子

け知らせてもらえなかった「セツちゃん」のことを屈託なく笑いながら話す。両親が嘘を信じてくれているから、加奈子は安心して嘘をつける。加奈子の両親が「セツちゃん」が嘘だったことを知り、驚きや疑問、不安、切なさを加奈子に感じるが、嘘に騙され続ける。加奈子も嘘をつき続ける。よって加奈子の「明るいみんなの人気者」というアイデンティティが守られているのだ。

私の場合は小学五年生でバスケットボールのクラブチームに入団したことだった。周りよりも遅い入団に焦りながらも、全ての休みをバスケットボールに費やした。飛躍的な成長を遂げ、スターティングメンバーになるなどかなり好調だった。小学六年生になるまでは、小学六年生で監督が代わり、急にダメになってしまった。スターティングメンバーはおろか、よほどリードしない限り試合にすら出ることができなくなった。友達関係も変わった。「スターティングメンバー組」の友達とお弁当を一緒に食べなくなった。「補欠組」で少し離れたところで食べる日々だった。監督からは分かりやすく嫌われていた。「お前なんか

生きてる価値ない」と罵られ、ため息とともに諦められ、「運のない奴だ」と突き放された。金曜日の夜が何よりも恐ろしかった。あたたかいはずの布団がやけに冷たくて重くて、泥をかぶっているようだった。そんな想いを絶対に悟られまいと、必死に笑顔を張り付けた。何度か退団の話が出たが、「楽しいから続けたい」と嘘をついていた。こうすることで「バスケットボールを頑張っている私」というアイデンティティを守ってきた。バスケットボールがなくなってしまうたら何も残らないと錯覚していた。いつも楽しそうにバスケットボールのことを語る私に、両親はどのような想いで接していたのだろうか。今思い返してみれば、両親は全部分かっていたような気もする。そう考えると両手をつないでもらっているときのようなあたたかさにくすぐったさが私を優しく包む。加奈子も何年後かにきつと今のことを思い返すだろう。何とも言えないくすぐったさを加奈子は何にたとえるだろう。

このように加奈子と私の家族は似ている。私たちは、両親のことを信頼しているから両親に嘘をつける。両親は、私たちを守る

ために嘘に付き合ってくれている。ここで「親への嘘は愛情か」という疑問に答えることができる。「親への嘘は親への信頼と親からの愛情である」と。さらに、「嘘はいけないことなのか」という問いにも自信を持って「いいえ」と答えられる。嘘は心に降る雨に光として現れ、虹をかけるのだ。その虹こそが家族の信頼関係の懸け橋となっているのだろう。一つ思い出したことがある。父に「私がバスケットボールをやってきて一番嬉しかったのはいつ?」と聞くと「自分からバスケットボールをやめたいと言ってくれたときかな。なにことも長く続けていればいつてことじゃないって自分で気づいて考えてくれたことが嬉しかった」と。ドライブ中のことだったので、すぐに窓を開けて瞳に輝くものを誤魔化した。そういうことだったのか。今までどれほどの愛情を注いでもらってきたのか、やっと分かった。「ありがとう」が瞳に輝く。これからも嘘に付き合つてよね、といったずらっぱく心の中で白い歯をのぞかせた。

体験書籍

『ビタミンF』より「セツちゃん」

重松 清 新潮社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

いつか、カムパネルラに

岩手県立宮古高等学校 三年

佐藤楓恋

じいじが死んだ。

どんよりとした曇り空から雪がちらつく、今年の二月上旬のことだった。受話器を片手に告げてくる母の淡々とした声色。私はそれに、うん、とだけ頷く。日に日に細る四肢と、病院のいやになるほど白いシーツに溶け込んでいく頭皮を見ていたから、驚きはしなかった。ただ、数時間前までは確かに存在していた命が、こんなにあっさり消え去ってしまうことへの静かな憤りが私の胸を押さえつけて、なんとも言えない気分させられた。

じいじは小説が好きな人だった。愛読書

は任侠ものや刑事ものが多く幼い私には理解できなかったが、老眼鏡をかけて読書に似そむ姿は様になっていて、いつしか真似て私も本を読むようになった。祖父母の家にいる時間の中では、会話より読書の時間の方が長かった。思えば、私が本の虫になったのはじいじのせいかもしれない。

私が特に好きだったのは『銀河鉄道の夜』。押し入れに仕舞われていた宮沢賢治全集の中から引っ張り出してそればかり読んだ。「青白く光る銀河の岸に、銀いろの

空のすすき」。目の前にありありと現れるその情景に心躍らせ、ひたすらにページを繰る。星々を閉じ込めた宝石箱のようなお気に入りの物語だった。しかし私にはひとつだけ、心にひっかかることがあった。

どうしてカムパネルラは、自分を犠牲にまでしてザネリを助けたんだろう。何度読んでも納得のできる答えを見つけられずに子供ながらに頭を悩ませていたことを今でも覚えている。

高校生になったある日、現代文の授業で宮沢賢治の『永訣の朝』という詩に出会っ

た。そこで初めて賢治の妹・トシの存在を知った私は、トシが生涯を終える直前の言葉に衝撃を受けた。

「(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまあよにうまれてくる)」

来世では人のために苦しめる人になりたい、その自己犠牲的な願いから、カムパネルラと似たものを感じた。死の間際にそんなやさしいことを、どうして願えるのか。私ならきつと後悔や死への恐怖を吐き出しかできないと思う。なぜ、どうして。教科書にとらめっこしてぐるぐると考え込んでいると、ふとじいじの、病床でのうわごとが思い出された。

おれが死んだあと、かれんは大丈夫かな。大丈夫に決まると鼻で笑ったけれど、今となつては、自分が一番苦しい状況だというのに私を案じたその言葉が、どれだけ思いやりに満ちていたのかわかる。あのときのじいじは、カムパネルラのようにだった。そう感じて、長年の疑問がやっと解決したように思った。その人が生きているうちで大切な人と大切な時を過ごせば過ごすほど、人はやさしくなれる。最期に人のた

めに願えるのは、貰ったぶんのやさしさを、返してあげようと思うからではないか。カムパネルラがどうしても幸せにしたいと言っていたのはおつかさんだった。きつとおつかさんからたくさんの愛情を貰っていたからこそ、人を大切にする気持ちを知っている彼はザネリを見捨てられなかったのかもしれない。

ひと月後、私は中央大学名誉教授の渡部芳紀さんのもとを訪れていた。カムパネルラについて、トシについて、もっと知りたかったからだ。渡部さんは快く私を迎え入れ、お話をしてくださった。

お話の中で特に印象に残っているのは、『永訣の朝』の後半、賢治がトシのために雪をとってこようと外に出た場面のことだ。「この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまつしろなのだ

あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ」

賢治の持つ陶器のお椀にはらりとやってきたひとひらの雪は、陰鬱で恐ろしげな曇り空から来たにしてはあんまりにもきれいだ。だから賢治は、雲の向こうに、このまつしろで美しい雪を生んだに相應しい、

澄んだ空が御座すのだろうと考えたはずだ。そして同時に安堵した。これから亡くなる妹が向かう先である天が、きつととても美しいものだと思に至って。

それを聞いて、この詩は亡くなるトシを悔やむものでもあり、トシの天国への門出の祝福でもあるとわかった。やはりトシも賢治からたくさんの愛情を貰っており、それゆえにあんなやさしい言葉を遺せたのだ。人を心から大切に思う時、きつと誰しもカムパネルラになる。私もいつかなれるだろうか。自分の死に際はまだ想像できないけれど、私が生きていくなかで貰ったやさしさを大切な人に返して、それがまた伝播していけばいいな。カムパネルラや、トシや、じいじみたいに。そう願う十七の夏が、終わろうとしていた。

体験書籍

『新編 銀河鉄道の夜』宮沢賢治 新潮社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

未完

（未完）

その文字に、ページを繰る手が止まった。何の前触れもなかった。ページを一枚めくると、そこで物語は途絶えていた。

私は、初めて徳田秋聲の作品を読んだ。文豪たちの中でも特に難しいような気がして、読むのを敬遠していたのだが、やはり途中で何度も放り出しそうになった。そんな私のページを繰る手を進めていたのは、登場人物たちには、最後、どんな未来が待っているのだろうかという期待だった。しか

し、その期待は裏切られた。小説の最後には「終わり」か「つづく」しかないと思っていた私にとって、それは大きな衝撃だった。

銀子は、客の男に結婚話を取り消された時、「馬鹿は死ななきゃ癒^ならない。」という言葉を思い返している。この言葉での「馬鹿」は、低い身分から来る、自分で自分の身を滅ぼしてしまう愚かさのことだ。確かに、生まれついた身分は、死ぬまで離れない。それを、私とあまり歳の変わらない銀

石川県立金沢泉丘高等学校 一年

原崎咲来

子が、自ら悟ったのだと思うと、せつなく、やるせない気持ちになる。いつになったら、自堕落で他者に依存する生活から抜け出せるのかの目処^{めど}もつかず、家族のために働き続けた銀子。彼女がハッピーエンドを迎えられないどころか、結末も与えられないことに、私は悲しくなった。

私は、奨学金を受給している。父がもうすぐ定年を迎え、収入が激減してしまうからだ。小学生の頃、公民館での習い事が終わった後、父が迎えに来たことがあった。

その時、公民館の先生が「おじいちゃんが迎えに来ているよ」と私に伝えたことが、忘れられない。初めて、他の家庭との違いを意識した瞬間だった。それでも、そのことを恥ずかしいとも、嫌だとも思ったことはない。しかし、一つだけ、気になることがあった。それは、勉強についてだ。塾や家庭教師など、学校外で勉強をしようとすると、お金がかかる。そのため、誰に言われたわけでもなく、勉強のことで両親に迷惑はかけないようにしようと、密かに心の中で決めていた。大人は口を揃えて、良い大学に行かなければ、多くのお金は稼げないと言う。しかし、私の場合は、将来お金を稼いで親孝行をしようという考えではなく、収入と学歴による負の連鎖に反発したかっただけなのかもしれない。世の中で一般化した、塾に行けなければ勉強ができない、勉強ができなければ良い職業に就けないという構図を、崩したかったのだ。その負のサイクルに自分が組みこまれることが悔しく、自分の努力次第では、そこから抜け出せるということを証明したかった。

高校生になった今、幼い頃に感じた反発心も薄れ、何のために勉強しているのか

分からなくなってきた。自分が人生の中で、いったい何をできるのだろうか。周りの友達が、自分のできることを見つけて、着々と進んでいるのを見て、焦りを感じる。それでも自分から行動を起こすことはできず、ただ毎日を空費してしまう。定められた運命から逃れようとがむしゃらに努力し、自分を見失った私と、「未完」に閉じこめられて、どれだけ頑張っても抜け出せない銀子。どこか似ているように感じた。

ところで、この作品はなぜ、未完のままこの世に送り出されたのだろうか。巻末の解説に、息子に宛てた秋聲の置き手紙が載っていた。「少しくらい妥協してみたところでダメのようです。妥協すれば作品は腑ぬけになる」。実は、太平洋戦争の勃発を控えた連載当時、芸者の世界を舞台としたこの作品は不謹慎であるという理由で、政府から干渉を受けていたのだ。そして秋聲は、筋を変えて書き切るよりも、潔く筆を置くことに決めた。自らの意思で、作品を未完にしたのだ。

私には、秋聲が筆を置いたことで、銀子の負のループが断ち切られたように思える。初めは、「未完」は終わらないことの象徴

であり、銀子は苦しい生活から抜け出せないでいるのだと考えていた。しかし、未完になった理由を知り、新しい視点から捉えることができた。「未完」は、望んでいない結末へと流されるよりも、途中で一区切りをつけ、新しい物語を再スタートさせるための選択だったのだ。長くしまりなく続く負の連鎖には、目の覚めるような終止符が必要だ。流れに身を任せるのは簡単だが、自分の人生に妥協をしてはいけない。私は、自分のやりたいことが見つからないのを、無意識に社会のせいにしていたことに気がついた。正直、せっかく巡ってきたチャンスをいつも逃してしまう銀子をもどかしく思い、心のどこかで軽蔑していた。しかし、銀子は、自らの境遇を恨まず、誰に対しても素直に接していた。一瞬一瞬を全力で生きる銀子の姿を見て、ネガティブな思考のループに陥っていたのは、私の方なのだと気づかされたのだ。これからは、一度立ち止まって、まだ未完成な自分の人生と前向きに向き合っていきたい。そして、(未完)

体験書籍

『縮図』徳田秋聲 徳田秋聲記念館

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

叶えたい未来のために

京都府立乙訓高等学校 三年

木和穂乃香

起床、午前五時三十分。六時に仕事が始まる。定時の休憩時間はほぼなく、あつという間に一日が終わる。ここ丸亀警察犬訓練所で私は警察犬訓練士を目指す。

私は幼い頃から犬が好きだった。近所の犬をなでようとして、噛まれたこともあったが、この愛しい存在が大好きだった。そして高校生になって、気持ちに変化が生じた。それは、殺処分される犬たちの存在を知り、目を向けるようになったことからだ。「可愛くなくなったから」「凶暴だから」

といった理由で飼いに捨てられ、殺処分される。私はそんな現状を見過ごすことができなかった。将来は人間の理不尽な理由で捨てられてしまう小さな命をゼロにするために働きたいと考えるようになった。そんな時だった。新型コロナウイルスの影響による休校。

世界を混乱と悲しみで包み込んだ非常事態だが、私にとっては人生の転機となった。起伏のない自粛生活の中で出会ったのが、『見習い警察犬 きな子』という本だった。

警察犬試験に何度も失敗しながらも、めげずに挑戦を続ける見習い警察犬と、訓練士を目指す十八歳の女性の奮闘を描いた物語で、実際に警察犬として活躍したラブラドル・レトリバーのきな子がモデルになっている。私は見習い同士の一人と一匹が困難を乗り越えながら成長していく姿に心を奪われた。主人公と年齢が近いこともあり、未来の自分を見ているような感覚にさえた。警察犬訓練士は犬と共に行方不明者の捜索を行うことで社会の役に立つこ

とができる。その活動で人と犬との強い結びつきを人々に伝えることができるのではないか。また、そのノウハウを生かして家庭犬をしつけることで飼い主に捨てられる犬が減り、その結果、殺処分される犬を一匹でも多く救えるのではないか。そう考えた私は警察犬訓練士になることを決めた。

心が決まれば行動に移すのみ。高校二年の冬休み、私は警察犬訓練所に一週間の研修に行くことを決めた。行くのなら憧れのあの場所。その思いで選んだのが丸亀警察犬訓練所だった。そこは本のモデルになった警察犬きな子が実際に暮らした場所で、現在ほきな子の孫やひ孫が訓練に励んでいる。はやる気持ちを抑えながら、ついに迎えた研修の日。讃岐富士の麓、土器川の隣、いつもより大きく広がる空の下、本で読んだ景色が広がるこの場所が私はとても気に入った。ここでの仕事は犬舎の掃除やグルーミングといった日常的な犬の世話や警察犬・家庭犬の訓練、フードの販売など多岐にわたる。今の私にできることはほとんどなかったが、与えられた役割に精一杯取り組んだ。

しかしその二日後、私は早くも疲れ果て

てしまった。慣れない生活リズム、水仕事であかぎれだらけの手、長靴の中で凍える足。想像をはるかに超える過酷さに私は疲労困憊だった。食事よりも睡眠よりも何よりも犬が一番のこの場所で、働いていく自信はすっかりなくなってしまった。本の中で主人公が「犬が好きだとか、人助けしたいとか、そんな気持ちだけで、この仕事は務まらない」と言っていた意味が痛いほど分かった。もうここには来たくない。一度目の研修は現実に打ちのめされて終わった。

高校三年が目前に迫る春休み、私の頭の中ではまだ葛藤が続いていた。訓練士になりたいが、厳しい仕事をやり抜く自信が持てなかった。そんな時、私の心の中に二つの言葉が浮かび、どんどん存在感を増すようになった。それは本の中で主人公の訓練士が言った「自分がなりたいものをめざすのが一番や」という言葉と、その訓練士を育てあげた所長から私が直接教えられた「なるからには本物にならないかん。嘘もんになんぞ絶対になつたらいかんので」という言葉だった。夢は手放したくないと、これらの言葉に背中を押され、私は二度目の研修を決意し、丸亀に向かった。

二度目の研修中、警察犬の大会を見るチャンスに恵まれた。制服に身を包んだ訓練士の方々と試験に挑む警察犬たちの姿を目の当たりにし、諦めかけていた気持ちはどこかへ行き、私もあんなふうになりたい、絶対に警察犬訓練士になりたいと再認識できた。この気持ちはきつとこれからの私の支えになると思う。

私がこの体験を通して学んだのは、何でもやってみることが大切だということだ。勇気を出して一歩踏み出せば、未来はどこまでも広がってゆく。何度挫折してもその度に立ち上がればいいのだ。そして、私は警察犬訓練士という仕事で日本だけでなく世界のことも学んでみたい。私の活動でこの先の未来に、人と犬を幸せなかたちで結ぶ懸け橋を作り上げたい。

この体験記を書いている今も、私は灼熱の太陽のもと、四度目の研修に励んでいる。いつかこの手で小さな命を救うために、私は今日も努力する。

叶えたい未来のために。

体験書籍

『見習い警察犬 きな子 (圭太の物語)』

ひろはたえりこ 汐文社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

もしも恐竜がいなかったら

兵庫県立飾磨工業高等学校 二年

高須賀風牙

私は、工業高校に通っている。ものづく

りが好きで、将来もそれに関わる職業につきたいと思い、日々勉強に励んでいる。そんな私が、恐竜に興味を持ちはじめたのは、小学生の頃からだろうか。今でも恐竜の映画を頻繁に観るほど好きである。ただ格好いいと思うだけでなく、今も解き明かされていない謎に包まれた生態に心惹かれる。何億万年も前にこの地球に恐竜という生物が存在していたかと思うと、ワクワクしてくるのだ。今は、その恐竜を形にする塑像

作品にも取り組んでいる。

先日、書店で偶然この本『鳥類学者無謀にも恐竜を語る』に出会った。一般的に、恐竜についての図鑑や、研究や調査された資料、映像化したものは、数多く存在する。しかし、恐竜専門の研究者とは違い、鳥類学者からの視点で恐竜について述べられた資料は珍しい。そのタイトルに惹かれ、私の知的好奇心がぐすぐぐられた。鳥は恐竜だという主張に、私は批判的である。この主張は正しいのかどうか改めて自分の考えを

明らかにしたいと思った。何故、鳥と恐竜が深い関係にあるのか、また著者が何故無謀にも恐竜を語る必要があったのか知りたくなったのである。

この本で、特に興味をもった点は二つある。一つ目は、「鳥類が気嚢きのうをもつのは、恐竜からその性質を受け継いだからと考えられるのだ」と述べている点だ。この気嚢とは、鳥類が備えている呼吸器官だ。それは、体を軽量化すると同時に、効率よく呼吸するのに役立っている。恐竜がもってい

た気囊は、大変便利であったため、そのまま鳥へ受け継がれたのではないかと述べている。鳥類は、恐竜から進化してきたという説は、今や恐竜の研究者にとって通説となっているが、川上さんという鳥類学者からの視点で考察されたものであるため、説得力がある。恐竜が鳥の祖先だという決定的な証拠をまのあたりにしたように思えた。二つ目は、「肉食恐竜が世界を安定させていた」という点である。まず、恐竜はゲップを排出すると述べている。ウシやヒツジなどの動物は、植物を分解する過程で体内にメタンを発生させ、ゲップを体外に排出する。このゲップは現代において、温室効果ガスの発生源として考えられ、その全体の一〇から二〇パーセント程度を占めているそうだ（但し、恐竜の生理機構については全く分かっておらず、あくまで現生動物から得た数値から仮定したものである）。

竜脚類の恐竜やウシなどの植食者から発生したガスの影響は、地球規模の温暖化をもたらした可能性もある。この植食者である恐竜を捕食するのが、よく知られるティラノサウルスのような肉食恐竜である。こ

の肉食恐竜が植食者を捕食することは、地球環境を考える時に、大変重要な役割を担っていたことに触れられている点が面白い。つまり、肉食恐竜は当時の地球温暖化を最小限に抑える環境調整機能を持っていたということにつながるからだ。

もし、過去に肉食恐竜が存在しなかったら、植食者が増え、森林は減少して地球温暖化が進み、現在私たちが暮らせる地球環境は整っていなかったのかもしれない。それだけでなく、私たち人間は存在すらしていなかったかもしれない。今、私がここに生きていることは、肉食恐竜のおかげといってもよいのではないだろうか。

この本を読み終え、著者は無謀にも恐竜を語ったのではないと思えた。その根拠は、鳥類学者の堅実な研究や知識があり、鳥類と恐竜との接点を明確にし、鳥類の祖先は恐竜であると述べているからだ。鳥との関係はとても深く、鳥類学者にしか書けない根拠のある文章によって、この本を読む私の批判的な気持ちは変わっていった。

この本を通して、疑問に思ったことなど問題解決への糸口を得るために、関係する様々な資料にあたり、比較検証することの

大切さや、違った視点でものを見ることで新しい発見ができるということも同時に学べた。

この本により、私が小学生の頃感じたワクワク感は、より大きくなり、さらに恐竜を知ることができた。恐竜の存在や生態から、様々な想像をかきたてられる。これが恐竜の人氣が絶えない理由だと思う。

今、空を飛んでいる鳥を見ると、恐竜を思い浮かべてしまう。こんなにも身近に感じられるようになり、改めて恐竜はロマンあふれるものだと感じた。

現在制作中の恐竜は、鳥類に近いといわれているヴェロキラプトルだ。この塑像作品には、この本で語られていた鳥との関係性や恐竜の格好よさ、壮大さをイメージしながら表現していきたい。

体験書籍

『鳥類学者 無謀にも恐竜を語る』川上和人

新潮社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

大石先生が伝えられなかったことを私が

香川県立坂出高等学校 一年

矢野愛実

中学校の修学旅行が、新型コロナウイルスの影響で日帰りとなり、初めて小豆島に渡りました。そこで「二十四の瞳映画村」を訪れ、友達とフォトジェニックな壁の前で写真を撮り、修学旅行から帰ってきました。香川県出身の小説家の書いた本が当時映画化されたことは聞いたことがありましたが、映画を見たことも本を読んだこともなく、高校生になり図書館でこの本を見かけ手に取りました。大石先生と十二人の岬の子どもたちが、貧困や第二次世界大戦という大きな時代の波にのまれながらも成長

していく物語です。私が印象に残っているのは、コトエや松江の存在です。小学生が家の都合で進学できない。ましてや登校できないことがあるのだろうかと思いついてみると、ヤングケアラーという言葉にたどり着きました。ヤングケアラーとは、通学や仕事のかたわら、障がいや病気のある親や祖父母、年下の兄弟などの家事や介護、世話をしている十八歳未満の子どものことです。最近の国の調査では、中学二年の五・七パーセント、高校二年の四・一パーセントがその対象で、中学二年においては

約十七人に一人とされています。またそういう生活が始まったのは平均で九・九歳頃と言われており、国は小学生を対象を広げ、実態を把握するとしています。ヤングケアラーは全国的にも認知度が低く、国が調査を始めたのも今年からで、私も調べるまでこの言葉を知りませんでした。ヤングケアラーに対する「世話をしているためにやりたいけれどできていないこと」の調査では半数以上の人が「特にない」と答えています。これは本人たちがヤングケアラーの対象だという自覚がないことを示してお

り、自覚がないということはその苦勞が表に出にくく、周りの人が気づきにくいというところがうかがえます。

私は行きたい学校へ入学して毎日母が作ってくれる弁当を持って通学しています。家に帰れば夜ご飯が食卓に並び、そんなに豪華ではありませんが、家族でテーブルを囲んで食べています。それが当たり前だと思っていたので、家族の世話に時間を取られ勉強や睡眠の時間が削られて学力が追いつかなくなったり、登校できなくなったりするなど考えたこともありませんでした。人には勉強する権利が与えられています。それと同時に家族を守る、大事にするという義務も背負っています。確かにその両立は難しく、進学を諦めるなどの選択を迫られることもあるのではないかと思います。大石先生は物語の中で、この二人のどちらにも学問の楽しさを伝えることができませんでした。大石先生がそれを歯がゆく思ったり、学校の面白さを伝えられないまま、高松で再会する松江の前にして何もできないことを悔しく思ったりする様子を見て、今はどうなのだろうと思いました。今は子ども自身がインターネットを通して相

談できたり、気づいた大人が通報したりするなど様々な仕組みがあります。安心すると同時にふと思ったことがありました。ヤングケアラーと言われる本人たちに自覚がなければ問題は何も解決しないのではないかと。「もう、きまっとるん。」「晩ごはんたくもんがないから、こんどはわたしにめしたき番になるんです。」この言葉は、物語の中でコトエが上の学校に上がるのを勧められて大石先生に言った言葉です。私が母に弁当を作ってもらい学校に行くのが当たり前のように、彼らにとっては至極当たり前のことで、そこに疑う余地はないのです。

私には、膝の裏にみんなには無い骨があります。座ると椅子にその骨が当たりとても痛いんです。正座したり屈伸をしたりすると骨が肉をえぐっているような感覚がして気持ち悪いです。けれど、生まれた時からあるものなので、みんなその痛みに耐えているのだと最近まで思っていました。どうしてみんな痛がらないのだろう。みんな我慢強いなあ。私は我慢が足りないからこの骨が邪魔で仕方ないと思えるのかなと小さな疑問はありましたが、病院で診断され

るまでみんなに無いこと、大きな問題があることだとは思っていませんでした。問題が違うとは言え、小さなころから当たり前のようにあつたものや、当たり前のようにしていたことが、実は大きな問題なのだと気づかないと思ったのです。ではその問題に気づくのは誰なのでしょう。

この物語の冒頭に、大石先生が十二人の岬の子どもたちに一時限を使って出席を取るシーンがあります。大石先生は、周りの声はもちろん本人の声の大きさや仕草で子どもたちの特徴を掴んでいきます。私はここに答えがあるのではないかと思うのです。家庭と同じくらいの時間を過ごす学校で一番近くにいる大人、つまり担任の先生が気づくことが大事なのではないかと。私の将来の夢は、不登校の子どもたちと向き合える先生になるということです。そのうえで、ヤングケアラーの存在ももっと勉強して、どんな生徒にも、学校の、勉学の楽しさを伝えられる先生になりたいと思います。

体験書籍

『二十四の瞳』 壺井 栄 講談社

強靱で深く、明るく、大らかに

作家 辻原登

『「聲文化」とは、聴覚という感覚を持たないことで発生した手話という言語や、視覚と触覚を重視した生活から生まれた文化である』（『聾者は障害者か？』）。

私ははっとさせられた。折々、思いもよらなかった斬新で、それまでの世界観を一新させられるような「英知」に出会うことがある。奥田桂世さんの文章はそのような「英知」にみちている。

『私の場合は、日本語とは異なる独特の語順や文法が存在する「日本手話」という全くの別の言語を、第一言語として身につけた』（傍点辻原）

障害者ではない、独特の文化を持つ「少数民族」なのだ。この認識は強靱で深く、明るく大らかだ。高い水準の批評の域に達している。

永田詩織さん（『夢の折り目』）が高校生にして建築を専門に学んでいる、と聞くだけで羨ましい。建築を通して、二次元から三次元へ、平面から立体へ、夢想・思念から現実へ、あるいはその逆の移行を日々体験している。その移行の一つ一つが永田さんの青春の「折り目」だと分かる。建築が本で、本が建築なのだ。

『親への嘘は愛情か』（岡崎愛子さん）を読んで、バスケットボールのクラブチームの監督への怒りが込み上げた。こんな不正と言葉の暴力が許され

ていいのか。監督に象徴される集団の暴力に対する、岡崎さんの「嘘」は「心に降る雨に光として現れ、虹をかけるのだ」。嘘を包み込んでくれる両親の愛情が「両手をつないでもらっているときのようなあたたかさ」とくすぐったさ」と表現される時、岡崎さんの洞察は『ビタミンF』の作者より深いかもしれない。

『もしも恐竜がいなかったら』（高須賀風牙君）は、今回の最終候補作品中、堅実な論の展開、テキストの要約のうまさで光っていた。

高須賀君の本への興味そのものが知的である。恐竜から鳥へ、鳥から恐竜へ、この二つの道筋を丁寧かつ簡潔に辿りつつ、恐竜や牛のゲップによる温室ガス効果の問題へと展開するかと思えば、空を飛ぶ恐竜へと空想を馳せる。知識と夢を立体化するかのうちに、彼は今、鳥に近いとされる恐竜の塑像の制作に励んでいるとのこと。是非見たい。

カムパネルラの死から、自己犠牲の精神はどのように涵養されるのか、という佐藤楓恋さんが立てた問いは鋭く、かつ繊細で、探し求めた答えは、『永訣の朝』と佐藤さんの祖父「じいじの言葉」から導き出された。「貰ったやさしさを大切な人に返して」いく、その伝播を期待して、彼女

の十七歳の夏は終わろうとしている。

『未完』（原崎咲来さん）の小説を読むのはなかなか骨の折れることだ。しかし、未完とは知らず、完結を目指して「銀子」（『縮図』）の人生を辿っていた原崎さんが、不意に「未完」という断崖に立たされた時の驚きは如何ばかりか。その驚き、戸惑いを「長くしまりなく続く負の連鎖には、目の覚めるような終止符が必要だ」と転回し、「未完」を「再生」へのターニング・ポイントとする原崎さんの批評眼に脱帽。

警察犬訓練士になるという「叶えたい未来のために」木和穂乃香さんは、京都から瀬戸内海を渡って、本の舞台となった丸亀警察犬訓練所の研修に通う。何度も挫折する。しかし、挫けない。諦めない。その決意と奮闘の汗が文章から迸り出る。

映画『二十四の瞳』を私は小学生の時、夜、お寺の境内の屋外スクリーンで観たことを思い出した。矢野愛実さんは映画の舞台の小豆島を訪れた後、小説『二十四の瞳』を読み、『ヤングケアラ』という言葉に辿り着く。誰も気づかないヤングケアラの存在、矢野さんの膝の裏にある骨とその痛み。思いがけない気づきを巡ったの思考から、人生に真摯に向き合おうとする矢野さんの優しさが伝わって来る。

世界の見え方が変わる

歌人

穂村弘

『聾者は障害者か?』は非常に力のある作品だった。自分の中で考え抜いてきた思考が、読書体験記という機会を得て言語化されたものだろう。

『聾者』というものは、健聴者とは異なる文化を持った、「少数民族」のようなもの」というくぐりだり、選考会の席上でも大きな話題となった。このような視点獲得の背後には、『日本語とは異なる独特の語順や文法が存在する「日本手話」という全く別の言語を、第一言語として身につけた』という個人的な体験がある。その起点から『障害者』という言葉を考え直すことが、「多様性」を維持する社会を実現する第一歩ではないか」という結論までの血肉化された論理の説得力に感銘を受けた。本作を読む前と読んだ後では世界の見え方が変わる。

『夢の折り目』は、そのタイトルやですます調の文体の柔らかさに不思議な魅力があった。「前方車両から波のように伝わる揺れを感じながら、長く考え事をしていました」という冒頭から、おやつ、と思わせる。本筋に直には関わらない記述でありながら、自然に気持ち伝わってくる。論理だけでなく感覚的な同調性に訴える筆致が、私小説やエッセイにも通じるような印象を生み出している。

毎年の候補作を読んでいて、多くの文章に共通の弱点を感じることがある。それは優れた作品ほど「反論の余地のない正しい結論になりがち」と

いう点だ。残念なことに現実の世界はその正しさに従うとは限らない。正しさへの確信が思考停止と世界像の固定に繋がることさえあるだろう。言葉で世界像の像を変えるためには、時に正しさを超えて現状を揺るがすような思考実験が必要になるんじゃないか。「親への嘘は愛情か」には、そのような創造性を感じた。「嘘はいけない」という一般に認められた考えの正しさが、読書体験と実体験の両面から検証されている。「私は虹色の嘘をつきたい」という冒頭の一文には挑発的な魅力があった。或いは小説なども、そういう「嘘」の一種かもしれない。

『大石先生が伝えられなかったことを私が』の体験書籍である『二十四の瞳』は七十年前の作品である。その作中人物を新しい概念である「ヤングケアラー」という言葉と結び付けたところがユニークだ。さらに「ヤングケアラー」本人の自覚の薄さが、作者自身の「みんなには無い骨」を巡る意外な体験に繋がってゆく。なるほどなあ。昔の本と新しい言葉と実体験、三つの要素の組み合わせが新鮮だ。

『もしも恐竜がいなかったら』は、恐竜好きの作者が選んだのが専門家ではない鳥類学者の本なのが面白かった。無意識のうちに「違った視点」を求めていたのか。その結果「空を飛んでいる鳥を見ると、恐竜を思い浮かべてしまう」までになったという。新たな視点の獲得によって脳内の風景

が変化したのだろう。自らの手で恐竜を形にする塑像作品の制作によって、さらなる視点が得られることを期待したい。

『未完』の面白さは、体験書籍である『縮図』の内容だけでなく、それが「未完」に終わったことに着目した点にある。改めて考えてみると、予測不能な死によって強制終了される我々の人生は、そもそも「未完」性を帯びている。小説と実人生の「未完」性を巡る文章を読みながら、読書体験にメタ的な視点が導入されるスリルを感じた。

『叶えたい未来のために』は、本の世界と現実を真直ぐに結ぼうとする姿が印象的だ。そのために作者は厳しい経験をすることになる。『主人公が「大が好きだとか、人助けしたいとか、そんな気持ちだけで、この仕事は務まらない」と言っていた意味が痛いほど分かった。もうここには来たくない」というくぐりだりは忘れたい。読書が現実の役に立ちましたという体験記が多い中で、この挫折は逆に胸を打つ。

『いつか、カムパネラに』の一行目を見て、おっと思つた。「じいじが死んだ」。祖父が死んだでもおじいさんが死んだでもないのだ。たぶん、いつもそう呼んでいたのだろう。この感覚は文中に引用された宮沢賢治の妹トシの方言とも響き合うようだ。「大切な人」との関わりを思う時に、だからこそいつも通りの言葉を選ぶというセンスに惹かれた。

読書体験記を「読む」体験

作家

角田光代

『いつか、カムパネルラに』を書いた佐藤楓恋さんは『銀河鉄道の夜』で抱いた疑問を『永訣の朝』という詩でさらに深め、日本文学者に話を聞きにいつて、答えを自分なりに生み出す。その過程において、祖父の死にたいする「静かな憤り」が、静かな愛情へと変わっていくさまがのびやかに描かれている。

徳田秋聲の未完の小説を読んだ原崎咲来さんは、「未完」であることの意味を考え、未完であることは登場人物たちを閉じこめる檻ではなく、終わらない未来へのスタートだと結論づける。この体験記もまた未完にすることで、自身の将来へと舵をあらたに切っている。

パンデミックの自粛生活で警察犬の物語を読んだ木和穂乃香さんは、冬休みを利用して警察犬訓練所の研修に参加する。その行動力に私は驚き、穂乃香さんの「叶えたい未来のために」、心から拍手を送りたい気持ちになった。まさに読書と体験が一体となり、それが将来へのたしかな道となっている。

『もしも恐竜がいなかったら』を書いた高須賀風芽さんは、「鳥は恐竜だ」という説に異を唱えたくて鳥類学者の本を読む。結果的に、鳥類の祖先は恐竜だとする著者の言葉に納得するのだが、そ

こに至るまでの思考がていねいに、堅実に描かれていて、なるほどと私まで納得させられた。

『二十四の瞳』に登場する、家事をせねばならない子を、ヤングケアラーだとする矢野愛実さんの文章が新鮮だった。戦前から終戦後、貧困家庭は多く、そのために進学できない子は多かった。それを当然のこと、しかたのないこととせず、現代にあてはめる矢野さんの文章は、静かだが、強い意志で「気づき」の重要性を語っている。

永田詩織さんの『夢の折り目』は個性的な文章で綴られる、一編の小説のようだ。電車に揺られる時間、本を読む時間、そして模型が立体になっていく時間が、このうつくしい文章には平行して流れている。小児病棟の模型が立ち上がり、そのとき永田さんの夢もまた立体になる。その瞬間の描写に感動した。

『親への嘘は愛情か』というタイトルがまずいい。学校でいじめを受ける子どもが、それを親や教師に言えないのは、いじめられている自分が恥ずかしく、親にたいして、そんな子どもで申し訳ないという気持ちがあるからではないかと、私は思っていた。でも岡崎愛子さんは、それは親への愛情ゆえだと分析する。その視点のやさしさが新鮮だった。

自身が聾者である奥田桂世さんの『聾者は障害者か?』の、読書に端を発する骨太の思考と、それを文章にする際の確さが、読み手にとって頑強な説得力となる。聾者に囲まれた状況で、健聴者が「普通ではない」と思っていたという箇所、私が漠然と見ていた世界がぐらりと揺らぎ、反転した。日本手話についてのエピソードも興味深く、「少数民族」というたとえも驚くほど伝わりやすい。限られた文字数のなかで、世界が揺らぎ反転し、深く考えるという体験を読む側にさせてくれる、柔軟でありながら強固な体験記だ。この体験をできたことが、私はうれしかった。

新たな視点をもつこと

文部科学省
初等中等教育局主任視学官

長尾篤志

『いつか、カムパネルラに』は、自分の祖父の死と『銀河鉄道の夜』のカムパネルラの死を重ねて考察した作品である。全体に落ち着いたトーンで文章構成もよい。中学生や高校生のころ「死」について考えることは少なくない。その時『銀河鉄道の夜』の読者は強く印象に残っているカムパネルラの死と結び付けて思索することが多いのかもしれない。佐藤楓恋さんは、「人を心から大切に思う時、きっと誰しもカムパネルラになる」という考えに到達している。

永田詩織さんの『夢の折り目』は、読み終わった後、立ち止まって「自分の折り目は何だったのだろうか？」と自分自身を振り返らせる作品である。何となく短編小説を読んだ後の感覚に似ている。物事がうまくいかない時など、ふと思いついて自分自身を励ましたり勇気づけたりしてくれるもの。きっと失敗なども繰り返しながら何かをやり遂げたその瞬間がその人の「折り目」なのだろう。

『聾者は障害者か?』は、大変貴重な提言である。最近「多様性を認め合う」という言葉はよく使われる。奥田桂世さんは、この言葉に対して脳科学者の考えをもとにその実現が甘くないこと、新たな視点を持ち込む必要があることを提言する。先天性の聾である奥田さんは、聾文化という言葉を通

通して『聾者というものは、健聴者とは異なる文化を持った、「少数民族」のようなものだと思うようになった』と述べている。一方、今の社会で「聴覚障害者」と上からの目線で見られる違和感をヒトの脳がもつ性質にあるのではないかと、とっている。確かに、「障害者」という言葉の見直し一つをとってみても、確実に前に進めるためにはそのような視点が必要だと感じた。

『未完』は、徳田秋聲の『縮図』が未完に終わったことを自らの今の在り方に結び付けて考察した作品である。文学作品が社会の一面を切り取っている以上、場合によっては表現に圧力がかかることがある、それゆえ『縮図』は未完に終わった。その作者の姿勢を知り、原崎咲来さんは未完部分をどのように想像したのだろうか? 少なくとも、自分自身の生き方については新たなステップに足をかけたようだ。

『親への嘘は愛情か』は、中学生や高校生をもつ保護者に一読いただきたい作品である。岡崎愛子さんは、16年間生きてきて両親に対してついた嘘が最も多く、それは愛情か? と疑問をもつ。思春期は人の成長も人間関係も難しい時期である。保護者は子供の言葉を信用したり不審に思ったりして不安な気持ちで子供の成長を見守っている。この作品は、子供の側の気持ちをうまく表現して

いる。

『叶えたい未来のために』は、読書体験が実体験になり、一人の高校生の未来を応援するものになったことを表現した作品である。筆者の木和穂乃香さんの行動力にも感心する。一度目の研修では打ちのめされても本に勇気づけられ再度挑戦をしてやり切り、夢をかなえるために努力している。この作品を読むと、真っ黒に日焼けしてキビキビと動き回っている笑顔の女子高校生の姿が目につく。

『もしも恐竜がいなかったら』は、自然科学を学ぶことのワクワク感がうまく伝わる作品である。恐竜が地球上に現れ繁栄を極めている時に突如姿を消したことが、その容姿とともに多くの人を恐竜に引き付ける。ただ、高須賀風牙さんは「もし、過去に肉食恐竜が存在しなかったら」との視点で考察を加えている。とても新鮮な視点である。

『大石先生が伝えられなかったことを私が』は、『二十四の瞳』から現代社会との対比で新たな視点を知らされる作品である。当たり前だと感じていることの背後に大きな問題が潜んでいることに『二十四の瞳』から見いだす矢野愛実さんの鋭さに感心する。社会を批判的に見ることで健全な瞳をもっていると感じる。

読書による自分探し

全国高等学校長協会

林達也

奥田桂世さんの『聾者は障害者か?』は、非常によく書かれている文章でした。奥田さんご自身の、ご家族が聾者であり、それが「普通」であったということです。現在は自身を「聾文化」を持つ「少数民族」と捉え、そこにアイデンティティを持つに至ったことは自然な流れでした。「普通」とは一体なにかを考えさせてくれる文章でした。

永田詩織さんの『夢の折り目』はティーンエイジャーの苦悩や、もがいている姿が率直に描かれている点が非常に素直だなと思いました。冒頭小説のワンシーンのような電車内での描写から始まり、他者と比べ中身がない自分への自己嫌悪から解き放たれ、ものづくりを通して自分自身を見つめなおしていく過程が描かれています。「夢の折り目」を見つけるきっかけがものづくりであったことや、そのテーマが小児病棟であったことが深くかわっていると思います。

岡崎愛子さんの『親への嘘は愛情か』は、深い共感をもって読むことができました。指導者による悪質な言動によって、大好きなスポーツを続ける気持ちがなくなっていくだけではなく、人格を否定され打ちのめされていく。岡崎さんは親を思うがための嘘をつくことによって、自分自身のアイデンティティをかううじて保ち続けることがで

きたのだと思います。家族の愛情が感じられる小説のようなラストに救われました。

佐藤楓恋さんの『いつか、カムパネルラに』は温かさを感じる文章でした。読書に導いてくれた祖父の死を「静かな憤り」で迎え、『銀河鉄道の夜』のカムパネルラに『永訣の朝』のトシを重ね合わせ、「人を心から大切に思う時、きつと誰しもカムパネルラになる」と自己の生き方を見定めたのは素晴らしいことだと思います。

原崎咲来さんは、徳田秋聲の『縮図』を読んで、「まだ未完成な自分の人生と前向きに向き合っていきたい」気持ちになったということです。本文が文字通り未完であったため、読者の創造力がたくましくなります。昔の通俗小説のような内容を原崎さんはリライトしたかのようです。未完であることに積極的な意味を見出し自分の読みを提示しているのは読書の醍醐味といえると思います。

木和穂乃香さんの『叶えたい未来のために』を読み、夢をあきらめず、愚直に努力し続けていくことの大切さを改めて考えさせられました。世に犬好き、猫好きは多いですが、犬を訓練することとは犬中心の生活になることでした。木和さんは最初の挫折があったからこそ厳しい研修に耐えられるのだと思います。

鳥の祖先は恐竜だったという説が有力です。しかし、高須賀風牙さんは当初は納得できず、批判的精神から読書していきました。批判的に読むことから古代の恐竜と現代の地球温暖化の問題をつなげて考えることができました。書かれていることを鵜呑みにするのではなく、関係する諸資料に直接あたることは研究者の第一歩であり、高須賀さんの興味が今後どこへ向かっていくのか楽しみです。

矢野愛実さんは、『二十四の瞳』を読み、現代の問題につなげて読書を深めていきました。かつては（残念ながら現代も）さらなる学びを妨げるものは貧困でした。矢野さんは、今日的な問題であるヤングケアラーの問題に気づき、読みを現代のものにしていきました。すべての子どもたちの学ぶ権利をまもるために、学ぶことの楽しさを伝えるために学校の先生を目指すということでした。『二十四の瞳』が現代でも息づいていることを矢野さんの文章から私も気づかされました。

第41回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

【優良賞】 39編

（ ）内は体験書籍名

北海道	道立	札幌月寒高等学校	一年	近田果穂	きよしとおとうと（『きよし』）
青森県	県立	八戸高等学校	三年	田中愛莉	ノープレス・オブリージュ（『生れ出づる悩み』）
宮城県	県立	宮城第一高等学校	二年	畑 志穂	喜びを描く（『明日をひらく言葉』）
秋田県	私立	秋田令和高等学校	二年	中塩和幸	カープが私を変えてくれた（『精神科医が語る熱狂の広島カープ論』）
山形県	県立	山形西高等学校	二年	伊藤心優	相手の靴を履いてみる（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
福島県	県立	福島東高等学校	一年	鴨原莉子	時の流れに親しむ（『モモ』）
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	西村奈緒	普通（『水を縫う』）
群馬県	私立	共愛学園高等学校	二年	小倉未羽	平和を築く（『黒い雨』）
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	池上葉奈	家族の特権（『流星ワゴン』）
東京都	私立	学習院女子高等科	二年	矢部優希	殻の下に忍ばせる（『氷柱の声』）
神奈川県	私立	慶應義塾高等学校	二年	石井想大	滅亡を前にした幸せ（『滅びの前のシャングリラ』）
新潟県	私立	新潟清心女子高等学校	一年	矢久保葉月	かがみのそとでも（『かがみの孤城』）
富山県	県立	高岡南高等学校	一年	宮腰侑来	運命の出会い（『かがみの孤城』）
福井県	県立	若狭高等学校	一年	田中桜千穂	自分らしさが世界を創る（『水を縫う』）
山梨県	県立	甲府東高等学校	一年	細井さつき	差別のない未来をつくるために（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
長野県	県立	屋代高等学校	一年	峯村瑠衣	自信を光に変えて（『子どもたちの光るこえ』）
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	佐野晴菜	人間の強さ（『ふた（それ）と呼ばれた子 完結編 さよなら』）
静岡県	私立	静岡サレジオ高等学校	一年	安部真唯子	七年前の私からの贈り物（『炎のタペストリー』）
三重県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	一年	坂井田紀子	明日への光（『水を縫う』）
滋賀県	県立	水口東高等学校	二年	岡 杏莉	繋ぐ、繋がる（『そして、バトンは渡された』）
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	天城由結	かけがえのないもの（『星の王子さま』）
奈良県	県立	高田高等学校	一年	森脇陽花里	音楽を届ける（『僕らは風に吹かれて』）
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	笠間心琴	自分らしく生きるために（『私は私のままで生きることにした』）
鳥取県	県立	鳥取湖陵高等学校	二年	田中珠生亜	『L』（『ノーサイド・ゲーム』）
島根県	県立	飯南高等学校	二年	片地ことの	ことだま（『やる気にさせる 高校野球監督の名言ベスト66』）

岡山県	県立	倉敷商業高等学校	二年	松本奈々	心の声という光（「死にたいけどトッポッキは食べたい」）
広島県	私立	広島文教大学附属高等学校	二年	金田胡桃	見方を変えてみると（『介護・ケアに役立つ実例集 認知症・アルツハイマー病』）
山口県	県立	熊毛南高等学校	二年	上岡京史	ふつうに食べられる幸せ（『摂食障害の語り』『回復』の臨床社会学）
徳島県	県立	脇町高等学校	二年	坂東祥吾	伝えるということ（『わかりやすさの罠 池上流「知る力」の鍛え方』）
愛媛県	県立	今治西高等学校	二年	三浦音央	「彼」とイギリスから学んだエンパシー（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
高知県	県立	高知西高等学校	二年	坂本真緒	その人中心のケア（『ボクはうつと認知症のことがわかった 自らも認知症になった専門医が、日本人に伝えたい遺言』）
福岡県	私立	明治学園高等学校	二年	小海茉由	ひねくれ者は曇天を仰ぐ（『女生徒』）
佐賀県	県立	武雄高等学校	一年	北川 輪	空色の表紙と空色の瞳（『スタートライン 一歩踏み出せば奇跡は起こる』）
長崎県	県立	猶興館高等学校	二年	岡村汐希	生きること（『死にたい、ですか』）
熊本県	私立	九州学院高等学校	一年	櫻庭菜々美	夢の方位磁針（『トラベジウム』）
大分県	県立	杵築高等学校	三年	真鍋 匠	働くことの意味（『虹色のチョーク 働く幸せを実現した町工場の奇跡』）
宮崎県	私立	宮崎学園高等学校	一年	甲斐 桜	生まれて、生きて（『あん』）
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	三年	福峰日菜	生きること（『生きかた上手』）
沖縄県	県立	開邦高等学校	一年	宮城心輝	冒険が生んだ平和のかから（『フリーハグー』）

【入選】

185編（各県の校名・氏名は五十音順）

北海道	道立	帯広柏葉高等学校	二年	トウヤトルフスリン	思春期を共にしたアンネへ告ぐ（『アンネの日記』）
	道立	札幌国際情報高等学校	一年	近藤海成	「ソト」から見る「ウチ」（『望遠ニッポン見聞録』）
	私立	札幌第一高等学校	二年	藤井とう心	チャプターーから再挑戦（『英単語の語源図鑑』）
	道立	室蘭清水丘高等学校	三年	能登あいり	私の人生、主人公は私。（『私は私のままで生きることにした』）
青森県	県立	八戸高等学校	三年	小瀬川 音	「普通」を捨て、「らしさ」へ（『水を縫う』）
	県立	八戸高等学校	三年	附田和花	夢を叶える入門書（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	県立	八戸中央高等学校	三年	坂田直香	失うものの得るもの（『海街diary』）
	県立	八戸東高等学校	一年	鈴木架洋	普通とは何か（『自閉症の僕が跳びはねる理由』）
岩手県	県立	一関第一高等学校	一年	戸谷雪乃	家族になろうよ（『そして、バトンは渡された』）
	県立	一関第一高等学校	二年	山田侑佳	この夜が明けたら（『よるのばけもの』）
	県立	黒沢尻北高等学校	二年	三好里桜	私の答え（『世界一ありふれた答え』）
	県立	盛岡第四高等学校	一年	松原佑奈	最上の一瞬（『蜜蜂と遠雷』）
宮城県	県立	泉陵高等学校	三年	矢崎和葉	わかりあえないことは許されている（『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』）

	県立	仙台二華高等学校	三年	井崎英里	川の守り人（「せんだいむかしばなし」）
	県立	古川黎明高等学校	一年	猪又朱夏	祖父の遺した言葉（「ツナグ」）
	県立	古川黎明高等学校	一年	菅原 栞	有り難いものゝ十六歳の語り部から私へ（「16歳の語り部」）
秋田県	私立	秋田令和高等学校	二年	遠藤夢知	課題の分離（嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え）
	私立	秋田令和高等学校	二年	長澤大耀	今に生きる秋田藩（「シリーズ藩物語 秋田藩」）
	県立	大曲高等学校	二年	伊藤子龍	ツチガエル（「カエルの楽園」）
	県立	大曲高等学校	二年	小松陽向	オレンジ（「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」）
山形県	県立	新庄北高等学校	二年	坂本和香奈	2028年の私への挑戦（2020年6月30日にまたここで会おう 瀧本哲史伝説の東大講義）
	県立	長井高等学校	二年	佐藤 颯	当たり前だと思っていたことの大切さ（「君の臍臓をたべたい」）
	県立	山形工業高等学校	三年	井上佳音	靴紐を解く（「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」）
	県立	山形西高等学校	二年	川口燈乃	明日を育てる（「そして、バトンは渡された」）
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	堀田雅織	命のリレーに潜む影（「私は臓器を提供しない」）
	県立	安積黎明高等学校	一年	山田悠真	震災を乗り越え、今を生きる（「心のおくりびと 東日本大震災 復元納棺師 ー思い出が動きだす日」）
	私立	郡山女子大学附属高等学校	三年	斎藤千裕	未知への第一歩（「夜間飛行」）
	県立	福島東高等学校	一年	吉川咲樹	白血病とサラバ！（「サラバ！」）
茨城県	私立	茨城高等学校	二年	山下藍葉	時の流れ（「モモ」）
	私立	水城高等学校	一年	秋山莉穂	日常を学びへ（「めんそーれ！化学 おばあと学んだ理科授業」）
	私立	水城高等学校	一年	笠原綾乃	考えることをやめない（「あなたの右手は蜂蜜の香り」）
	県立	水戸第一高等学校	一年	高田真緒	私と辞書（「舟を編む」）
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	小倉心優	命の選別（「選べなかった命 出生前診断の誤診で生まれた子」）
	国立	小山工業高等専門学校	二年	岩渕理央	キキと共に歩む人生（「魔法の宅急便」）
	国立	小山工業高等専門学校	三年	相川祐輝	母のくれる幸せ（「紙の動物園」）
	国立	小山工業高等専門学校	三年	小野里泉吹	二度となんて言わせない（「世界の果てのこどもたち」）
群馬県	市立	伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校	四年	入沢百花	それぞれが生きる場所（「かがみの孤城」）
	県立	桐生高等学校	一年	山崎心結	青でもピンクでもないジブン色（「水を縫う」）
	県立	高崎女子高等学校	二年	中澤莉子	自分が自分であるために（「逆ソクラテス」）
	県立	前橋女子高等学校	二年	木村夏希	二十世紀からのメッセージ、かもめのジョナサンより（「かもめのジョナサン」）
埼玉県	県立	小鹿野高等学校	三年	林 楓奈	在りし日の悲しみ（「汚れつちまつた悲しみに……」 中原中也詩集）
	県立	川口北高等学校	一年	澤田裕翔	コロナ禍と私達が気づかない根本の逆説（「逆説の生き方」）
	県立	和光特別支援学校	一年	綾田 景	Home Schoolingで得たいこと（「やさしく読めるビジュアル伝記 エジソン」）

千葉県	県立	市川東高等学校	一年	金子史奈	自分への課題（夢をかなえるゾウ）
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	三年	高橋龍生	ぶらんこ動く、心も動く（『フンタンぶらんこのせて』）
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	三年	宮川紗良	生きざま（『生き物の死にざま はかない命の物語』）
	県立	東金商業高等学校	二年	山田楓花	少年の夢、私の夢（『星になった少年』）
東京都	都立	北園高等学校	三年	林 倫太郎	男を愛する普通の男（『うちの息子はたぶんゲイ』）
	私立	光塩女子学院高等科	三年	首藤美結	科学者はヒーロー、研究は楽しい（『科学者になりたい君へ』）
	私立	聖徳学園高等学校	一年	田所小夏	ドネルケバブを食べる（『学びとは何か ——〈探求人〉になるために』）
	私立	女子学院高等学校	一年	安部加奈子	世界を見つめる瞳（『FACTFULNESS 10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』）
神奈川県	私立	湘南工科大学附属高等学校	一年	川田陽奈子	気づかない学びがある（『ちはやふる』）
	私立	聖セシリア女子高等学校	一年	菱沼咲希	勝てば官軍負ければ賊軍（『総統の子ら』）
	県立	平塚中等教育学校	四年	岩本実優	私と、誰かの、一つだけ（『星の王子さま』）
	私立	法政大学国際高等学校	三年	勝 楓花	天の上の彼女に捧ぐ（『14歳からの哲学 考えるための教科書』）
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	館岡有実子	奇蹟の音を目指して（『吹部！』）
	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	三年	宮澤咲衣	Relief（私が人生のどん底からはい上るまで）（『Relief』）
	県立	新潟高等学校	一年	小林侑生	共に前へ（『死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発』）
	県立	新潟高等学校	一年	森 向日葵	学びの連鎖（『ヒマラヤに学校をつくる カネナ「コネなしの僕と、見捨てられた子どもたちの挑戦」』）
富山県	県立	高岡龍谷高等学校	一年	村上彩華	セッターとしての姿（『セッター思考 人と人をつなぐ技術を磨く』）
	県立	砺波高等学校	二年	森田頌生	職業体験から学べるもの（『天使のにもつ』）
	県立	富山中部高等学校	二年	秋吉信征	生命といのち（『人魚の眠る家』）
	県立	福岡高等学校	二年	佐々木美和	母の本棚（『カンパネラ』）
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	二年	小松錦葵	本とグラウンドが教えてくれたこと（『あめつちのうた』）
	国立	金沢大学附属高等学校	一年	岩井 星	絵本から学んだこと（『ふたりはともだち』）
	県立	金沢西高等学校	一年	石川明育	私の持っている「幸せ」の種（『また、同じ夢を見ていた』）
	県立	金沢二水高等学校	一年	加藤愛菜	道化の自分と本当の自分（『人間失格』）
福井県	県立	金津高等学校	二年	竹下ゆいな	普通の夢（『水を縫う』）
	県立	高志高等学校	一年	川村華穂	自分は自分（『水を縫う』）
	県立	武生東高等学校	二年	木水 茜	いのちの選択（『いのちの停車場』）
	県立	武生東高等学校	二年	日下由梨	ひとり時間の大切さ（『ひとりの時間が僕を救う』）
山梨県	県立	都留高等学校	二年	小泉美乃里	好きだからこそ（『武士道シックスティーン』）
	私立	山梨英和高等学校	一年	石塚 光	生きてるって、なんか、すごい。（『星のかげら』）

	私立	山梨英和高等学校	二年	葛木侑菜	染まらない人生を（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	県立	吉田高等学校	一年	丹野愛深	マネージャーのあるべき姿（『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』）
長野県	県立	長野東高等学校	二年	関屋里彩	愛情は尊い（『アルジャーノンに花束を』）
	県立	長野東高等学校	二年	湯本隼多	当たり前だと思っていたこと（『君の膝臓をたべたい』）
	私立	松本第一高等学校	二年	沓掛令花	私たちの青い春とは（『オルタネート』）
	県立	屋代高等学校	一年	美齊津葉乃	目に見えない大切なもの（『よるのぼけもの』）
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	有田暖菜	仲間について（『あと少し、もう少し』）
	県立	加茂高等学校	一年	榎間あみ	母さんに伝えたい（『Wonder』）
	県立	加茂高等学校	二年	林 かりん	背骨（『推し、燃ゆ』）
	県立	岐阜北高等学校	一年	浅野七星	オンリーワン（『ドラえもんを本気でつくる』）
静岡県	県立	掛川西高等学校	二年	大崎知花	様々な視点で（『給食のおにいさん』）
	市立	静岡市立高等学校	一年	戸塚恵利菜	つながる音（『羊と鋼の森』）
	市立	浜松市立高等学校	三年	塚本乃愛	涙にかかった虹の橋（『ツナグ』）
	県立	富士高等学校	二年	深澤美加	臭う川（『心淋し川』）
愛知県	県立	一宮興道高等学校	二年	佐脇由那	思いやるこころ（『いころ』）
	県立	蒲郡東高等学校	二年	鴨下沙也加	心の変化（『女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと』）
	県立	天白高等学校	一年	森 結海	自分自身を生きること。（『大観自伝』）
	国立	豊田工業高等専門学校	二年	杉山さくら	かたらないもの（『歩きながら考えよう 建築も、人生も』）
三重県	私立	暁高等学校	一年	伊丹 蘭	正解か不正解か（『わたしの心が傷つかないように ひとりていたいけど、ひとりになりたくない自分のために』）
	私立	暁高等学校	二年	土性大地	「強く」生きるために（『君たちはどう生きるか』）
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	瀬古脩伍	勉強の意味（『手紙屋』 蛍雪編 私の受験勉強を変えた十通の手紙）
	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	二年	倉本こなつ	最後までやり遂げるこの意味（『あの夏の正解』）
滋賀県	県立	安曇川高等学校	二年	齊藤綾花	「逃げる」ということ（『かがみの孤城』）
	県立	高島高等学校	二年	日詰もな	この世はカラフル（『カラフル』）
	県立	東大津高等学校	二年	森谷心温	本当の平和（『ある晴れた夏の朝』）
	県立	彦根翔西館高等学校	一年	小松恵翠	わからないからやってみる（『『わからない』という方法』）
京都府	府立	桂高等学校	一年	柳生敦輝	普通じゃないことの強さ（『水を縫う』）
	私立	京都女子高等学校	二年	今北紗季	私色の人生（『『がんになって良かった』と言いたい』）
	府立	嵯峨野高等学校	一年	吉田小夏	「戦争」のみつめかた（『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』）
	私立	立命館高等学校	三年	前田望陽	同行する者としての教師（『15メートルの通学路』）

大阪府	国立	大阪教育大学附属高等学校 平野校舎	一年	金原菜つ乃	コンプレックスと人（『羅生門 蜘蛛の糸 杜子春 外十八篇』より「鼻」）
	市立	大阪市立高等学校	一年	佐々木 希	すべての人にハッピーエンドを（『物語のおわり』）
	府立	四條畷高等学校	一年	白岩優芽	五年分の足跡（『一瞬の風になれ』）
	府立	天王寺高等学校	一年	小林茉衣	「あの夏」を忘れない（『あの夏の正解』）
兵庫県	県立	加古川東高等学校	一年	井上朋音	ことばの力（『翻訳できない世界のことば』）
	私立	関西学院高等部	三年	中江勇斗	少数派の叫び（『52ヘルツのクジラたち』）
	私立	神戸国際高等学校	二年	高地晴七	海原の命（『戦艦大和ノ最期』）
	県立	姫路西高等学校	一年	玉作乙香	私の碁（『勝ちきる頭脳』）
奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	大野友美加	私からあなたへ言葉の花束を（『本日は、お日柄もよく』）
	県立	畝傍高等学校	一年	坂口心晴	災厄に向き合う人々（『夏の災厄』）
	県立	青翔高等学校	二年	西畑麗奈	数学とは何か（『青の数学』）
	県立	高田高等学校	三年	梅本麻瑚	知ることで見える差別（『LGBTを読みとく——クイア・スタディーズ入門』）
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	小林莉子	私にとつての夏への扉（『夏への扉』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	城谷 颯	平和実現のスタートラインに立つために（『戦争童話集』）
鳥取県	県立	鳥取西高等学校	二年	江谷美咲	もつと自由に自分らしく（『今日の芸術 時代を創造するものは誰か』）
	県立	鳥取東高等学校	二年	土井純奈	大人（『星の王子さま』）
	県立	米子東高等学校	一年	波多野日南	普通（『水を縫う』）
	私立	米子北斗高等学校	二年	田辺社人	思いを（『青の数学』）
島根県	県立	出雲高等学校	一年	中島佳凜	自分に寄り添い相手に寄り添う（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	県立	松江北高等学校	二年	石原成琉	「なぜ？」とこれから（『世界を、こんなふうに見てこらん』）
	県立	松江南高等学校	二年	田中天晴	力を与えてくれる時間（『そして、バトンは渡された』）
	県立	吉賀高等学校	一年	江谷稟空	自分らしく生きる（『教科書で読む名作 羅生門・蜜柑ほか』より「鼻」）
岡山県	県立	岡山工業高等学校	二年	鹿野なつめ	自分らしい生き方（『なぜ僕は働くのか 君が幸せになるために考えてほしい大切なこと』）
	県立	笠岡高等学校	二年	加藤こころ	スマホに使われる人間たち（『スマホ脳』）
	県立	倉敷青陵高等学校	二年	水野吉菜	再読と気づき（『レインツリーの国』）
	国立	津山工業高等専門学校	三年	鍋谷侑輝	潤い（『人質の朗読会』）
広島県	県立	大門高等学校	三年	井上遼香	生きていく上でたいせつなこと（『八番目の花が咲くときに』）
	私立	広島学院高等学校	一年	齋 良輔	奇跡の多様性（『泣き虫しよったんの奇跡 完全版 サラリーマンから将棋のプロへ』）
	私立	広島学院高等学校	一年	西尾嘉輝	きれいなこと（『さよなら世界の終わり』）
	国立	広島大学附属高等学校	二年	伊藤蒼空	つながりの処方箋（『友だち幻想』）

山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	藤本優有	世界中のメダカが自由に泳げる世界へ（『めだか、太平洋を往け』）
	県立	熊毛南高等学校	一年	村井楓梨	私の居場所（『日は好日「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』）
	県立	萩高等学校奈古分校	一年	飛田寧々	大人は嫌いだが……（『ぼくらの七日間戦争』）
	県立	萩高等学校奈古分校	三年	藤原千朋	いじめを乗り越える（『いじめ14歳のMessage』）
徳島県	県立	穴吹高等学校	二年	篠原柊花	犬を飼うという覚悟（『犬たちをおくる日 この命、灰になるために生まれてきたんじゃない』）
	私立	徳島文理高等学校	二年	吉野 蓮	私たちはどう読むか（『君たちはどう生きるか』）
	県立	名西高等学校	一年	森長碧乃芭	未来への架け橋（『金メダル男』）
	県立	脇町高等学校	一年	松村奈緒	私の進む道を照らす光（『神様の願いごと』）
香川県	県立	高松高等学校	一年	中西美海	雲外蒼天（『八朔の雪 みをつくし料理帖』）
	県立	高松高等学校	一年	和唐真希	夜と霧とコロナ禍（『夜と霧』）
	市立	高松市立高松第一高等学校	一年	佐藤咲那	生を慈しむ（『滅びの前のシャンゲリラ』）
	県立	丸亀高等学校	一年	大西彩巴	今日一日を楽しむ（『君の脾臓をたべたい』）
愛媛県	私立	済美平成中等教育学校	二年	石丸 彩	仲間と走る（『あと少し、もう少し』）
	県立	北条高等学校	二年	濱田優美	私にできること（『レインツリーの国』）
	県立	八幡浜高等学校	二年	飯野真歩	平和を創造するために（『ある晴れた夏の朝』）
	県立	弓削高等学校	二年	宗近みと	よつつめの……（『よつつめの約束』）
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	伊吹 藍	一滴の幸せ（『大河の一滴』）
	私立	高知学芸高等学校	二年	岡山紗奈	自分自分（『ぼくは勉強ができない』）
	私立	高知学芸高等学校	二年	山村 倫	あなたは何色？（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	私立	土佐女子高等学校	二年	野川愛梨	らしさからの脱却（『大人は泣かないと思っていた』）
福岡県	私立	筑紫女学園高等学校	二年	古海和歌子	心臓を捧げる勇氣（『進撃の巨人』）
	県立	東筑高等学校	二年	海野友志	『いっころ』の『いっころ』を考える（『いっころ』）
	私立	福岡第一高等学校	二年	柏木那菜	遠い世界に誘うもの（『葉指の標本』）
	県立	門司大翔館高等学校	一年	金澤莉子	星を見つける旅（『星の王子さま』）
佐賀県	県立	唐津東高等学校	一年	吉田ももか	家族の愛（『そして、バトンは渡された』）
	県立	唐津東高等学校	二年	岩田唯楓	多様性にあふれる社会（『家族だから愛したんじゃないで、愛したのが家族だった』）
	県立	武雄高等学校	二年	庄司萌菜実	聞こえない声を聴く（『52ヘルツのクジラたち』）
	県立	致遠館高等学校	二年	井上綾奈	小さな一歩（『顔面漂流記 アザをもつジャーナリスト』）
長崎県	県立	諫早高等学校	二年	波戸菜保子	もう、目は瞑らない（『さよなら、わるい夢たち』）
	県立	大村高等学校	二年	本多優介	居場所（『マカン・マラン 二十三時の夜食カフェ』）

長崎県	県立	長崎西高等学校	二年	検見崎 舞	言葉にできない生きづらさ（『ラスト・フレンズ わたしたちの最後の13日間』）
	県立	長崎南高等学校	二年	沖平千紘	『桜のような僕の恋人』を読んで（『桜のような僕の恋人』）
熊本県	県立	天草高等学校	一年	渡辺 唯	私の人生の宿題（だから、あなたも生きぬいて）
	私立	九州学院高等学校	二年	磯田大翔	『完全』に手を伸ばして（『青の数学』）
	県立	熊本高等学校	一年	弥永拡之	平和の人（『永遠の0』）
	国立	熊本高等専門学校	一年	中村眺大	心で見る物事の価値（『星の王子さま』）
大分県	県立	大分上野丘高等学校	一年	平松未有	希望（『砂の女』）
	県立	大分商業高等学校	三年	緒環愛子	私の意識改革（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	県立	大分豊府高等学校	二年	船津雅登	科学者とはなにか（『科学者になりたい君へ』）
	県立	杵築高等学校	二年	山本こころ	個性を知って見える世界（『跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること』）
宮崎県	県立	聖心ウルスラ学園高等学校	三年	松崎千奈	受け入れることの大切さ（『ベスト・エッセイ2012』より「こそそめスリーブ」）
	県立	高鍋農業高等学校	一年	田辺蓮斗	宮崎牛家族（『宮崎牛家族』）
	県立	都城泉ヶ丘高等学校	一年	城村瑞穂	私の後悔（『余命10年』）
	県立	宮崎大宮高等学校	二年	渡邊紗生	知る力のプロフェッショナルを目指して（『わかりやすさの罠 池上流「知る力」の鍛え方』）
鹿児島県	県立	大島高等学校	一年	實川結子	満たされた心（『ひらいて』）
	私立	鹿児島第一高等学校	一年	大出結菜	私の個性（『青い鳥』）
	私立	尚志館高等学校	二年	藤元愛夕	性の「名札」に縛られていたのは（『ぼくは性別モラトリアム』）
	県立	鶴丸高等学校	一年	島尾瑛梨奈	道端植物紀行（『植物図鑑』）
沖縄県	県立	首里高等学校	一年	高橋心葵	普通とは何か？（『檸檬先生』）
	県立	知念高等学校	二年	仲里実優	兄と向き合う（『あなたを愛しているつもりで、私は——。娘は発達障害でした』）
	県立	知念高等学校	三年	與座笑佳	行動を起こすこと（『ブロードキャスト』）
	県立	那覇国際高等学校	二年	田嶋伶菜	マネージャーとしての真摯さ（『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』）

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。（1月25日予定）
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

株式会社集英社が創業50周年を迎えた1976年、青少年の教育に熱心であった創業者、故相賀武夫氏の遺徳をしのび、これを顕彰するために、財団法人一ツ橋文芸教育振興会を文部大臣(現・文部科学大臣)の許可を受け、設立いたしました。そして2013年4月1日、内閣府より認定され、公益財団法人へ移行いたしました。

株式会社集英社は、創業以来、文芸出版活動に力を入れ、青少年文化の普及向上に努めてまいりましたが、当財団は特に青少年期における人間形成の重要性にかんがみ、主な事業対象を高校および高校生にしほり、学校教育の助成、青少年文化の向上発展に寄与すべく、「全国高校生読書体験記コンクール」や「高校生のための文化講演会」等を実施しております。

当財団は、株式会社集英社、株式会社小学館、株式会社白泉社、株式会社ホーム社、集英社ビジネス株式会社、集英社サービス株式会社、株式会社集英社クリエイティブ、株式会社一ツ橋企画の援助により事業を運営しております。

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会 (2021年12月現在)

理事長	廣野真一	集英社代表取締役社長
理事	河野光代	作家(角田光代)
同	國分正明	元 教職員生涯福祉財団会長
同	辻 一朗	歌人(穂村 弘)
同	沼野充義	東京大学名誉教授
同	菱村幸彦	元 国立教育研究所所長
同	堀内丸恵	集英社代表取締役会長
同	村上 博	作家(辻原 登)
常務理事	村田登志江	

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10 集英社ビル
TEL: 03-3230-6069 FAX: 03-5211-2663
Eメール: hbk@hitotsubashi-bks.jp
ホームページ: <http://www.hitotsubashi-bks.jp>

助成申請についてお願い

国語教育研究会・高文連活動等に関する助成は、主催者からの申請によって行います。上記へご相談ください。

沿革と事業内容

- 1976.5 ● 文部大臣より財団法人の許可を受け設立。
- 1976 ● 「高校生のための文化講演会」事業を集英社より引き継ぐ。
高等学校へ作家・学者・文化人等を派遣、講演時間は1時間。年間約80校で実施。開催時、全校生徒に小冊子『読書への招待』を配布、学校図書館に図書を寄贈。
- 1977 ● 高校生に対する「奨学金の給付」を開始。
(2006年より中断)
- 1981 ● 「全国高校生読書体験記コンクール」を開始。毎年6月に学校へ案内、表彰式を翌年1月下旬に実施。
- 1984 ● 高校生実態調査への協力を開始。
高校生の生活態度・意識等を海外の高校生と比較した「実態調査報告」を全国の高校に配布、またマスコミ機関にも提供。(2013年で当財団の助成は終了。なお、この事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構にて継続)。
● 災害罹災高校に図書贈呈等の事業開始。
- 1985 ● 高校国語教育研究活動に助成を開始。
全国大会をはじめ、県単位の研究会に対し、講演会講師派遣などの助成を実施。
- 1987 ● 高文連の活動に助成を開始。
「全国高校生文芸コンクール」をはじめ、県単位の文芸コンクール、図書委員研修会等、講演会の講師派遣や賞品の提供などの助成を実施。
- 1995 ● コバルトノベル大賞、ロマン大賞の後援。
(2013年より「ノベル大賞」を共催)
- 2007 ● 「聞き書き甲子園」に助成を開始。
- 2013.4 ● 内閣府より認定を受け、公益財団法人へ移行。
- 2021 ● 第41回「全国高校生読書体験記コンクール」応募総数449校、83,538編。
● 「高校生のための文化講演会」が56周年、開催校のべ4,205校、聴講生徒数約357万人。